



The Royal Photographic Society

Patron: Her Majesty The Queen. Incorporated by Royal Charter

NEWS LETTER

第 23 号 2012/06/28

発行所 英国王立写真協会・日本支部
〒107-0051

東京都港区元赤坂1-7-10
元赤坂ビル9F

Tel 03-5413-7829

Fax 03-5413-7410

E-mail : yoshi-rpsj@hotmail.co.jp

発行人 林 喜一 編集人 川村賢一

<http://www.rps-japan.org>



函館ハリスト正教会

第8回リレートーク 「新聞写真が一番」

昨年11月12日、東京六本木の霞
会館にて、第8回リレートークを開催。

前回は、高木陽光会員によるライブ
演奏とトークという特別企画でしたが、
今回は通常のスタイルにもどって、新
聞社のカメラマンとして、長年第一線
で活躍してこられた上田会員から、ジ
ャーナリスト的な立場から、学生に指
導してきた経歴などを踏まえてお話を
伺った。

上田 穎人

以前ニュースレター第6号で、「新聞
写真が一番」と題して、新聞写真の基
本的なことを書きましたが、今日はそ
れに肉付けしてお話したいと思いま
す。





写真を目指して新聞社入社

私は、高原会員と同じ千葉大学工学部写真印刷工学科の出身ですが、進路を決める時期に、写真は撮る仕事が一番面白いと思い、新聞カメラマンを目指し、朝日新聞社に入社しました。1964年の東京五輪の年でこの新聞社も採用人数が多い年でしたが、朝日には千葉大と日大から6人入社しました。

入社時の配属先は北九州市にある西部本社でした。その時の写真部長がカメラマンの将来を見据えた人で、「これからのカメラマンは撮るだけではなく、ジャーナリストとして記事も書けなくてはいけない」が持論でした。スピグラ(4×5カメラ)を使った新聞写真の基礎訓練を3ヶ月受け、鹿児島支局に記者の修行に出ました。記者研修は通常1年ですが、翌年、後輩が入社しなかったため都合2年2ヶ月も記者としての体験ができました。

その間、警察や県庁、その他の特殊官庁などを担当し、鹿児島版や一面、社会面のトップ記事などを書くと共に季節物の写真(スケッチ写真といえます)や初期のロケット打上げ(東大内之浦宇宙空間観測所)桜島噴火、台風などの写真も撮りました。気分は鹿児島駐在の写真部長でした。その後、社会部の記者にならないかと誘いがかったのですが、「写真を目指して入社したのだから、写真部に戻りたい」と断りました。

鹿児島から福岡勤務を経て(6ヶ月)、東京勤務になりました。その後、日本初の冬季五輪(1972年)取材を希望して札幌へ転動しました。元々大学での部活がスキー部だったので、希望を出したのですが、そうした希望がかなうところが、写真部の良さでした。所がブレ五輪の取材を終り、さあ本番と思っていた矢先に、大阪本社写真部長から「大阪へ来い」と声がかかりました。人事異動だけは断れませんので、条件として大阪から最優先で五輪取材に行かせてくれないかと要求したところ、受け入れてくれたため大阪へ転動しました。

大阪から声がかかったのは、多分大阪万博(1970年)応援取材の第一陣として、東京から行った時の仕事ぶりなどを認めてくれた担当デスクが、その後、部長に就任した最初の人事だったのではないかと思います。異動した場合、通常は3年ほどで戻るのでありますが、呼んでくれた部長が在任中は大阪にいようと決め、京都支局駐在を含め約9年近く大阪勤務を続けました。東京に戻ったのですが、2年後デスクとして再び大阪勤務になり又4年ほど務めました。

東京に戻りデスク勤務後、シニアスタッフになった55歳の時、写真部の高齢化もあり1年の約束で名古屋本社に転動しましたが、そこでは又、様々な素晴らしい体験と出会いがありました。記者は様々な人と会うことで特種を書くことができます。

名古屋では常滑市にある陶器会社 INAX の研究所長と仲良

くなり、東京へ戻ってから「世界遺産アンコールワット遺跡の基礎修復工事を INAX の技術でやっている」という電話をもらいました。話を聞くと、INAX が再開発した「長七たたき」と呼ばれる明治時代の伝統工法・人造石による修復でした。人造石は固まるとセメントよりも堅くなる「たたき」という100年以上前の左官技術を応用して作りますが、今も名古屋港や熊本・三角港の岸壁などが現役です。この人造石を再開発した記事のいわば続報で、INAX から写真の提供を受け、話を記事にまとめ私自身は現地へ行かずに、一面トップに掲載しました。(写真)

カメラマンではあるが、記事を書くのは新聞社では当然です。記者研修時代よく言われたのは「一本の記事を書くには、十のデータを集めろ」ということで、取材の基本はより多くのデータ、情報を集めることです。このことは写真にも言えることで、良い写真を撮るには現場へ何度も行き又、朝夕時間を変えて見るのが大切だと思います。

幸いにも私は写真部で現役カメラマンとして定年を迎えることができ、“生涯一写真記者”は入社以来の願望でしたので幸せな37年でした。

これから実際に紙面に掲載した写真の中から気に入っている数点を紹介し、その後、新聞写真の送稿の歴史や取材の裏話、苦労話などを写真や紙面をお見せしながら話していきたいと思います。

千日回峯の酒井雄哉さん(1978年・写真)

比叡山の修行で最も厳しいと言われる「千日回峰行」があります。私は、その行を達成した2人の阿闍梨を取材しましたが、酒井雄哉さんは、奥さんが自殺して坊さんになった人ですが、彼は千日回峰行を2回やっています。この写真は700日歩き終わると、行われる不眠、不臥の断食行「堂入り」前後の表情を撮ったものです。堂入り前に開かれるのは「生き葬式」といわれます。9日間比叡山のお堂にこもって、飲まず食わず寝ず、横にならず、延べ9日間続けます。始まる前は実にふくよかな顔ですが、9日目後の表情は苦行を象徴するようです。人物写真は新聞写真では一番多いのですが、このように対比して見せるのも一つの手法でないかと思い、狙ってみました。

風景考・足尾銅山(1994年・写真)

新聞写真のカメラマンは、オールラウンドですが独自のテーマを持って撮り続けている人もいます。秩父の小鹿野町に住込み地芝居を撮っている後輩や、テニス仲間でハンセン病を撮り続けている人もいます。

私は入社した年、鹿児島県の出水平野に毎年11月に越冬のため飛来するナベツルを、残月から撮影しました。これをきっかけに、風景ものもやりがいがあると思うようになり、定年まで取り組むようになりました。

中でもシニアスタッフになってから、仲の良かった社会部の環境問題に詳しい記者と全国の国有林を歩いたことがあるのですが、日本にはまだまだ世界遺産になるようないい所がたくさん残っている事に気がつきました。そこで、日曜版で風景についてもっと考えてみようとして「風景考」と題したシリーズを始めました。

新聞の基本は始めに記事があり、写真は追従するものですが、「風景考」では先ず写真を決め、記者をその後決めるという画期的な方法で始めました。これはたまたま編集長が写真に理解ある人だったことも幸いしました。



また、このシリーズでは環境破壊の目立つ日本だけに、負の遺産となるような象徴として、足尾銅山跡を取り上げました。足尾銅山の周辺は、ほとんど禿げ山です。今は、林野庁が毎年植林に取り組み、かなり緑も復活しましたが、取材した松木溪谷（日本のグランドキャニオンと呼ばれている）は、7キロに渡ってこうした枯木の残骸が残っていました。

500mほど登り、この光景を見つけて撮りました。同行した記者は、とても登れませんでした。今、一帯は世界遺産の日光に含めてもいいのではないか、という声が現地にはあります。

旅こころの風景「熊谷市・星川」(1999年・写真)

定年になる3年前から夕刊・マリオン面で「旅こころの風景」というシリーズを2年間担当しました。著名人が自分の心の風景と題したエッセイを書き、それを読んで撮影する企画でした。この企画は、筆者と写真の勝負でもありました。つまり、撮影した写真をまず筆者が納得、感動してくれなければならないからです。その次が読者です。

シリーズが始まると、なぜか川とか海、山が多かったですが、その一例として作家の森村誠一さんが書いたのが埼玉県熊谷市内を流れる星川という小川でした。

森村さんは写真好きで写真俳句でも知られています。現地へ行くと星川は改修されてきれいではあったが、今インパクトがない川でした。市の行事を調べると、近い内に星川沿いで秋祭りが開かれることが分り、それを狙うことにし、交差点にあるビル屋上から俯瞰撮影をしました。このシリーズは写真のサイズをタテ、ヨコ共1:2にする大胆な扱いでしたので、撮影時からトリミングを考慮して撮影しました。

掲載されると森村さんから丁寧な礼状が届きました。「我が町が、とても美しく、迫力ある映像となっていて、うれしく思っています。私も少しは、郷里に恩返しが出来たのかと喜んでます」と。写真に一言ある森村さんから、こういう手紙を頂き、非常に嬉しい思いをしました。どの写真でも、読者から反響があると一番やりがいを感じるものでした。

旅こころの風景「多摩川」(1998年・写真)

作家・篠田節子さんは学生時代作られた東京で発生した大地震を舞台とした映画から、ヒントを得て徒歩で月光下の多摩川を避難訓練する体験談を書いた。何回も夜の多摩川を歩いた末、やや上流の昭島市付近が自然の雰囲気が残っていたため撮影地と決めました。満月の夜、月光が水面に輝き、運良く川霧も発生して雰囲気のある多摩川が撮れました。この写真も篠田さんは大変喜んでくれました。

日本・音紀行「函館ハリスト正教会」(2006年・写真1面)

2001年に定年になってから、3年間は『俳句朝日』で「水のある風景」、「ニッポンの景」の連載を手掛けると共に東京工芸大学でフォトジャーナリズムについての話をしました。余談ですが教えた学生から名取洋之助賞、木村伊兵衛賞を受賞した子が出たのは何よりの喜びでした。『俳句朝日』廃刊後、夕刊のマリオン面編集長から声がかかり、担当したのが「日本・音紀行(もうひとつの風景)」でした。これは一番難しい企画でした。音をどうしたら絵に出来るのか...。「音を映像化できればノーベル賞ものだよ」と友人に言われたほどです。1回目は、江の島の裏側にある洞窟で、そこに波が押し寄せ、洞窟に響き渡る。それを撮りましたが、難しいシーンでした。

実はこのシリーズは、音を切り口に環境や文化を考える「サウンドスケープ」の研究に取り組む聖心女子大学の女性教授を中心とした4人のメンバーがテーマを決め、私たちが写真を担当するという企画でした。

事前に編集部からは、まず絵になるものを選び、かつ一年間で47都道府県から選ぶように注文を付けていたのですが、結果的には筆者の思い入れのある音風景がテーマとなり、かなりやりにくかった連載でした。

函館ハリスト正教会は雪景色でもあり、白一色でもつまらないので夕焼けを待って撮影しました。鐘の見えるアングルを決め、あしらいとして司祭にお願いして鐘楼に登り大鐘をアップで撮りました。



よくばり湯の旅「五島列島・荒川温泉」(2009年・写真上)

音の後は「よくばり湯の旅」という温泉シリーズでした。温泉ものは定年直前に「湯の畔」と題して、記事も書きながら手掛けたこともあり反対したのですが、新聞は何かテーマに困ると温泉シリーズを始めるんです。

温泉そのものは、中々絵になりませんが、今回は温泉又は周辺の面白い光景をメイン写真にする企画でした。群馬県の法師温泉などは温泉そのものが絵になる温泉でしたが、五島列島の温泉は海に面しているだけの公共の温泉で、結局は五島列島を代表する教会のある風景がテーマとなりました。

いくつかの教会を見た結果、丘の上に立つ教会に狙いを決めました。あいにくこの日は雨が降っていて条件は悪かったのですが、午後一瞬雨が止んで陽がサッと射した瞬間を押さえたのがラッキーでした。島内の全ての教会も見ましたが、もうこれを超える風景の教会はありませんでした。

橋に願いを「横浜ベイブリッジ」(2009年・写真右上)

湯の旅が終り、次は「橋に願いを」のシリーズが始まりました。始まる前の打ち合わせでは、横浜ベイブリッジのようなアマチュアがありとあらゆる所から撮り尽くしている橋は1回目だけは避けて欲しいと注文を付けていたのですが、矢張り1回目はネームバリューのある橋にしたいと押し切られました。

決れば仕方ありません。結局、2本の橋脚の中にエレベーターがあることが分り、その頂上から撮ろうと決めました。2人乗りのエレベーターで上がり、さらに鉄梯子を20段ほど登ると2層四方ほどの頂上に出ました。道路公団の担当者に付きっきりで安全バンドを着けてもらい、夕焼けに染まる横浜港と眼下を走る車を撮りました。これなら間違いなく読者が見たことのないアングルだろうと思いました。



橋に願いを「遠刈田大橋」(2010年・写真下)

これは宮城県蔵王町にある橋で、こけし職人の集落らしく橋の欄干脇四隅に高さ3mのこけしが立っていました。私はどこへ行くにも2段の脚立を持参します。使わないアングルの時もありますが、この時はこけしの顔をアップにして強調したいため脚立に乗り、両手を目一杯伸ばして撮りました。

写真をよく見ると、橋の手摺りに男女が写っていますが、朝6時過ぎの取材では点景としての通行人もいません。困っていたところに、うまい具合に30代の若い夫婦が来て、私の横で3脚を据えて記念写真を撮り始めました。そこで、私は撮ってあげますよと言って、撮ってあげました。

その後、「橋の上を歩いてくれませんか」とお願いしたところ快く歩いて下さりので絵としてまとまりました。この程度のやらせは、許容範囲で後日、紙面と共に写真をプリントして送ってあげましたら、大変喜んでくれました。

(つづく)



(編集後記) 今回は、内容の正確さと著作権、肖像権の問題なども考慮し、テープ起こし後改めて上田会員に書き下ろしていただいた。今回のトークは、写真を撮るものにとって大変興味深く、勉強になると感じたので、連載でできるだけ全文を紹介したいと思います。(川村)